

世界アルツハイマーデーかながわ
かながわオレンジ大使座談会

- 1 日時：2023年（令和5年）9月30日（土）14時20分～15時10分
- 2 方法：新都市プラザミーティングルームB及びZOOMウェビナー
- 3 参加者：（進行）鈴木しげ氏
（参加大使）SUZUKI YOU氏、伊藤敬子氏、矢作博之氏、前田博樹氏
- 4 内容：

鈴木氏： 少々時間を押しておりますけども、これより「かながわオレンジ大使座談会」を開始したいと思います。本日司会を担当する鈴木しげと申します。よろしくお願いたします。本日语り手となっていただけるのは、かながわオレンジ大使の前田大使、矢作大使、伊藤大使になります。YOU大使の方は、先ほど1階の方で一生懸命ラップを踊っておりまして、疲れたということで、少々休憩ということで、今回はスルーさせていただきたいなというふうに思っております。

まず、この座談会の目的を皆さんにお伝えしたいんですけども、この座談会の目的は、皆様、これから新時代を迎えるという時代において、希望のあるメッセージをぜひ発信していただきたいなというふうに思っております。

昔は、1973年頃には「恍惚の人」というような映画が上演された頃、すごく偏見に満ちた時代でした。認知症というと、「何もできない」「何もわからない」「恥ずかしい」「隠す」「支援されるだけの存在」「お先真っ暗」「家族も大変」というような、そんな形のイメージがありました。

そこから、時代とともに徐々にいい方向に変わってきまして、痴呆症と言われたものも認知症に変わり、恍惚の人から50年経った今、2023年には認知症基本法というものが誕生しました。希望を持ってこれからは生きていけるんだということの、新時代を迎えようということの意味しております。そこで今日は皆さんに、「いろんなことできるんだよ」「わかるよ」「ありのままの自分でオープンでいろんなことを活動していけるんだよ」「社会でもいろいろ貢献していけるんだ」「楽しくこれからは家族とも一緒に歩めるんだ」というようなところを、是非発信していただきたく、いろんな希望をとにかく挙げていただけたらなというふうに思っております。

ということで、座談会のテーマは『こんな社会であってほしい こんな社会だったら幸せ』という前向きなテーマで語り合っていただきたいなと思います。もちろん、一方的に前向きなテーマだけを話せと言われても、なかなか難しいところはあると思いますので、一応ルールとしては、批判や課題をたくさん挙げてあげて、それだけで終わっちゃう時は、僕の方で待たせていただくかもしれませんけれども、まず基本的にはご自由にお話し合いしていただきながら、いろんな希望のメッセージを送っていただきたいなと思っております。本日この座談会の後には、企業の皆様に、今いらっしゃっているんですが、一緒にさらに前向きな語り合いを含めて、具体的にどんなことができているのかというようなアイデア出しをするこ

とを予定しております。その前段階でもありますので、ぜひ皆さんが聞いてワクワクする、そんなお話し合いになっていただけたらと思います。お時間の方は、前置きが長くなってしまったんですが、15 時頃までですね。皆さんにお時間をお預けして進めていただきたいと思いますので、各自ちょっとずつ自己紹介していただきまして、そのまま進めていただけたらと思います。それではお時間をお預けしたいと思いますので、よろしくお願ひします。

矢作氏： すごい預けられ方ですね。まず自己紹介しましょうか。はい、どうぞ。

伊藤氏： 横須賀市から来ました伊藤です。よろしくお願ひします。

矢作氏： お願ひします。はい、どうぞ。

前田氏： 川崎から来ました前田と申します。よろしくお願ひいたします。

矢作氏： 川崎から来ました矢作と申します。よろしくお願ひします。前向きなメッセージということなんですけど、そもそも昔を知らないですね。昔がどのくらい認知症に対して後ろ向きな扱いだっただかということを知らないんですよね、自分は。ちなみに前田さん何歳ですか？

前田氏： 多分 60、3 か 4 か 5 か・・・

矢作氏： 60 代。伊藤さんは？

伊藤氏： 私は 74 歳。

矢作氏： 私 42 歳なんですけど。

伊藤氏： え！？だいぶ違う。

矢作氏： え、見えないですか？もっと若く見える？

伊藤氏： うん。なんか、話ししても分かるかな・・・

矢作氏： 大丈夫です、大丈夫です。そんな大したこと喋らないです。自分のこと喋るだけなんで。昔、認知症っていうイメージは・・・。認知症になった時ってなんか覚えていらっしゃいます？ うわー、最悪とか。

伊藤氏： 診断を受けた時は、すぐに杉山先生の講座を受けたりとかしたんですね。そうすると、もう 3 つか 4 つぐらいあったんですね。すぐにまず「寿命は人の 1.2 倍の速さである」「今までできたことはできなくなる」「新しいことは覚えられない」と「徘徊が始まる」 だいたいその 4 つ。

矢作氏： めっちゃ覚えてますね。

伊藤氏： 覚えています。その時は真剣に聞いていたからね。この 4 つさえなんとかすればいいのかなと思って。その時私の症状としては物忘れで、カレンダーにいろいろ書いていたんです。今日は何する何するって。どんどんいっぱい書くんですけど。壁かけのカレンダーでね。そしたら、それもいっぱいになっちゃったんですよ。それと、ちょっとうつ病で通院してたんで、先生に「こういう状態なんですけど」って検査したら、アルツハイマー型認知症。

矢作氏： 何歳くらいですか？

伊藤氏： 60 です。

矢作氏： じゃあもう 12、3 年前？

伊藤氏： はい。

矢作氏： 全然覚えてますね。

伊藤氏： 全然覚えてます、その辺は。13年ぐらい経ってるんですけど、それも少しずつ何か変だな変だなと思いながら、いろんなところにいっぱい出されちゃって。みんな思い出して。

矢作氏： 反復すればね。蘇るので。その反復だからこそ、今、結構喋れてる。

伊藤氏： その反復の中は結構ね、楽しいことばかりなんですよ。

矢作氏： ああ、そうなんですか。前向きのメッセージですね。

伊藤氏： そうなんです。その繰り返しできたかな。

矢作氏： 楽しいことって何だったんですか？

伊藤氏： ゴミ集積所の掃除当番を抜かしてもらった。ボランティアセンターを、徘徊先にしてもらった。この2つの経緯は何度も話しているので覚えている。

矢作氏： 前田さんは？ いつぐらいに診断されて？

前田氏： 会社に勤めている間は、なんとか何でもなると思います。会社を退職して、2年ぐらいまだ会社オーケーでした。それも終わったあたりから、本当に緊張感がなくなっていくような感じで、今に至ったという感じ。緊張するところもなくなったので、仕事と。

矢作氏： じゃあ、今の生活の中であんまり緊張するところがない？

前田氏： おかげさまで、なんとか緊張のない仕事をさせていただいています。

矢作氏： 緊張のない仕事をね。マイWayさんでね。やっぱ緊張があった方が、生活のメリハリみたいなのはつくんですか？

前田氏： それはその通りですね。ずっと緊張感がない一日だと、もうかえって疲れるような感じがして。緊張があるというのが数回あると、今日はよかったなど。何にも緊張がないっていう生活はあんまり良くないなというふうに自分では思っています。

矢作氏： なるほど。仕事をしていた時に、ちょっと物忘れとかでミスっちゃったこととかは、覚えていたりするんですか。

前田氏： 定年まではなかったですね。まったくごく普通に働いていたという感じですよ。

矢作氏： 私も今まだ進んでないかなと思っているんですけども、今後はするのかな？とっていて。でもアルツハイマー病の診断をされたのが、2020年の3月なので、もう今で3年経過しているんですよ。そこで、ケアマネみたいな仕事をしていて、皆さんの支援をしている立場で、支援をされる病気というのが、この世の中の当たり前なのかなと思っているんですけど。もう症状が進まなかったら、全然支援必要ないなっていう気持ちではいるんですけど。支援導入のきっかけとかにか……。

伊藤氏： 前田さんの緊張の話なんですけど、私主人と2人なんですけど、主人はアルコール依存症と発達障害の中の聴覚敏感の2つがあって、私それに対応しているんです。緊張なんです、毎日。自分のことも。とにかく、私が忘れちゃったらしょうがないから、スマホに入れることで。予定を全部入れることを、今ずっと習慣づけているから、割とミスもしないでやっています。やっぱり緊張なんです。一番大事なのは。

緊張した生活の中に、自分の趣味を見つけてほっとする。

矢作氏： 趣味は何ですか？

伊藤氏： 趣味はコラージュ。切り抜いて貼るという作業ね。それと、あとはやっぱりこういう絞り染めとかね。そういうのをやったり。あと革細工でキーホルダー作ったり。でも、この趣味は前からやってた趣味じゃなくて、認知症と診断されてから、デイケアで参加したりする中で、「あ、これ私好きなんだな」と思って。「趣味を持つことは、認知症の強みです」ってどこかで聞いたんでね。例えば、土いじりが好きだったけど、仕事していなかったら、この機会に土いじりができるデイケアとか、そういうところに行ったりとか。

矢作氏： 楽しくないことをやってもね。

伊藤氏： そう。楽しいことをやるっていうことは、なかなか、わかんないでしょ。日頃からこれやってないのに、「なんでこれやるんだ」みたいになっちゃうといけないけど、やっぱり楽しいことだけはやっていいんだよっていうね。

矢作氏： なるほど。よく認知症になると、「脳トレやりなさい」っていう人がいて、「脳トレが重要だ」みたいなことを言って、私の妻にも、「脳トレやる？」みたいなことを言われたことあるんですけど、「いやいや、脳トレとかマジつまんないから。本当に苦痛でしかないから。」っていうので断ったんですけど。やっぱり楽しいことを続けるって……。前田さん楽しいことありますか。趣味とか。

前田氏： 楽しいことというか、一番好きなのはテレビです。テレビの番組を見ているのが非常に楽しいです。好きな番組が決まっているんですけど。だいたい刑事ものとか。最後に答えが出てくる。そういうのが好きです。あとは麻雀かな。

矢作氏： 麻雀！めっちゃ頭使いますね。最近はやってない？

前田氏： ちょっとやらさせてもらっている。

矢作氏： 役とか覚えられなくないですか？

前田氏： いや、もう若い頃から麻雀やっていますんで、それは全然問題ないです。

矢作氏： 点数計算とかも？

前田氏： あ、もちろん。

矢作氏： すいません。なんか麻雀の話になっちゃって。麻雀やります？

伊藤氏： やらない。機会がなかった。

矢作氏： 結構楽しいですよ。

前田氏： 点数の計算とかは問題ないですね。むしろ麻雀を皆さんあまりやられたことはないと思うんですけども、一番最初に牌が来た時にビジョンを作るんですね。この牌でどういう役までいけるかというのを考えながらやっていくと。あとは、敵は3人いますので……。

矢作氏： 今は2人ですけどね。

前田氏： どうやって振り込まないようにするかというのも、自分の手だけ見ても駄目で、残りの敵の3人の出し方とか、どういうのを切っているかとかを推測しながら、振り込まないようにするというところが、非常に麻雀の好きなところ。

矢作氏： 点数計算とかもいけちゃうんですね。メンタンピンドラドラで、親がいくらですとか。

前田氏： あー、親満。

矢作氏： わかる人だけで楽しんでください。

前田氏： 1万2千ポイントです。

矢作氏： ありがとうございます。やっぱり昔の記憶って結構健在な感じですか？

伊藤氏： 数字に関しては、もう百も千も万もわからないですね。

矢作氏： じゃあ買い物とか大変ですね。

伊藤氏： 買い物は、大きいお金と、何十何円。頭の中は。言われたら、「はい」って。だから、お財布いっぱいになっちゃうけど。時々バラツといっぱい出したりして。やっぱり、できないものはできないです。

矢作氏： できないものね。

伊藤氏： しょうがないんだから。頭がね。そこは、覚えろ覚えろ覚えろって言っても、それはストレスになるから。自分でも、やっぱり数字は若い時から。「どっちが得かな」なんてものも、まずわかんなかったから。

矢作氏： どっちが得か？

伊藤氏： この積立とこっちの利息と、どっちのコースを選んだ方が得かなんて全然わかんない。

矢作氏： 「A銀行とB銀行の利息はどうなったか？」っていう感じですか？

伊藤氏： そう。そんなの全然わからない。あと、寿命は人の1.2倍の長さであるって言ったって、計算できない。なんか短いんだとか。

矢作氏： 確かに。1.2倍。そこは計算できないですよ。計算式は思い浮かばない。

伊藤氏： 2割っていうことなんでしょかね。70歳の時だったら、その時計算したのは70歳になった時・・・。

矢作氏： 56才？違う？

伊藤氏： 数字が苦手ですね。最近、漢字が・・・。「へん」とか「つくり」とか。その間に何か入っていったものとか。

矢作氏： 漢字は、もう皆さん「苦手です」って言うぐらい書いてないから、みんな書けないと思いますけどね。

伊藤氏： ごちゃごちゃって書いて、真ん中ごまかしちゃったりね。

矢作氏： はい。スマホで調べたりね。

伊藤氏： 私もやっています、スマホ。新しいのね はいらない。

矢作氏： いいじゃないですか。お金はS u i c aとかP A S M Oとかなかにか使ったりするんですか？

伊藤氏： それはだいたい入れています。駅でチャージして、5,000円ぐらいは入れておかないと、いざとなったら慌てちゃうでしょう？ だから、下りた駅でチャージして入れています。

矢作氏： 急に座談会のテーマに引き戻しちゃうんですけど、今後、困るかもしれないじゃ

ないですか、そこって。「お金がない！」って慌てちゃって、ピーピーピーって鳴る。その時に、「こういうふうな対応をしてもらいたい」とか何かあったりします？

伊藤氏： やっぱり、レジが心配なんですよね。だから、レジのところに行く前に、自分でお財布の中を見て、十円玉がこの辺にあるからこれを出せばいいって、ちょっと準備しないとね。レジって怖いんですよ。

矢作氏： 怖いですか？ パートのおばちゃんが怖い？

伊藤氏： パートのおばちゃんが怖いし、後ろもいるからね。すごい怖いから、そこでモタモタしないように用意しておくんです。千円札とか、見ておくのね。何か言われたら、これとこれとこういうふうにしてって。

矢作氏： 割とストレスですよ、それね。大変ですね。

伊藤氏： これは慣れた。よくお財布持ってて、レジの前でいくらですよって言われて広げて、カード出して、サッサッサッとやっている人を見るけれど、ああいうことは絶対にできない。慌てて出したりすると、お金とかカードとかバラバラになる可能性があるから、ちゃんとできるように。

矢作氏： それってスーパー？

伊藤氏： スーパー。

矢作氏： コンビニとかは、もうやったことがあります？ 小銭いっぱいあったら、コンビニの機械が最近セルフレジになってて、全部投入するんです。

伊藤氏： 30枚とかですか？

矢作氏： そうです。30枚はあんまり持っていませんけれど。30枚をバンッと投入すれば、ちゃんと計算してくれて、返ってくる。選ばないでいい。でもスーパーじゃできないんですよ。なかなかね。

伊藤氏： そうですね。コンビニはだいたい千円札入れて、1円とか10円とか細かいものを入れてしまう。

矢作氏： 選んで入れるやつですよ。次からやってみてください。取っただけ入れるっていう。

伊藤氏： ああ。お財布のこと。

矢作氏： そうです。自分で選ばないで済むので、レジの効率がめっちゃ上がるんですよ。どうでもいい話だったんですけど。なにかお金で支払いで困ったことがあります？ 駅でどこ帰ったらいいとか。

前田氏： あんまりお店に行って、支払いを間違えると、そういうシーンはほとんどないですね。特に生活の上では、そういうことはないですね。

矢作氏： なるほど。じゃあ、商品が、ある意味麻雀みたいな牌に見えて、点数計算できるような。

前田氏： あ、それはできますね。

矢作氏： 慌てたりとかはしないんですか？

前田氏： それもないですね。入る前に財布の中に入っているかということをチェックして、その中にちゃんと納まるかどうかというようなところは、一応きちんと見て

います。

伊藤氏： スーパーでスローレジレンというのがあると聞いたんですけれど、まだお目にかかったことないんですけれど。それはいいと思いますね。

矢作氏： レジのパートのおばちゃんも、めっちゃスローなんですかね？

伊藤氏： めっちゃスローじゃないけれど、当たりがいいんでしょうね、多分。

矢作氏： 「ゆっくりでいいよ」ということですよ。

伊藤氏： そうそう。そしたら、サッとそこの場所に行くから。行って場所だけ確保した後で、ゆっくりゆっくりとできるから。

矢作氏： そうですね。それが広まると、すごいスローレジだけみんな並んじやったみたいなね。そしたらスローレジ増えるかもしれないですよ。

伊藤氏： そんなことないですよ。やっぱり、スーパーは早く切り上げたって人もいる訳だから。急いでいる人はね。その人は、そっち（通常レジ）行ってもらえばいいのであって、お買い物を楽しんで、レジのおばさんと話すのを楽しむとか、そういうことができるようなレジができたらいいなと思います。

矢作氏： ポジティブな発言できていますか、鈴木さん？ 大丈夫ですか、これで？

鈴木氏： ぜひよろしくお願いします。

矢作氏： ぜひよろしくお願いします。今まで認知症っていうイメージの中で、やっぱり認知症に皆さんなりたくないと思うんですよ。支援の方、井竹さん？ 認知症なりたいですか？

井竹事務補助員： なるべく迷惑は掛けないようにはしたいですけど、なるかならないかはもう今の時代わからないので、なっても大丈夫な世の中になりたいですよ。

矢作氏： なっても大丈夫な世の中ってどうなんですかね？ 自分全然わからないんですけども。なっても大丈夫な世の中って何なのかなって。

井竹事務補助員： 受け手側が寛容になれるっていうことじゃないかなと思いますけれど。

矢作氏： 今回若年性の認知症として、私は普段発言していることって、なっても大丈夫な世の中って何かって言ったら、認知症って人事に伝えたら、人事の人がしっかりと今のできる状況、できる仕事を見極めて、どうするかっていうことを決めてもらいたいなってというのが、認知症になっても働き続けられる。もちろん、働き続けられない状態だったら、それはいろいろ休職とか退職とかっていうことは考えられると思うんですけど。同一労働同一賃金なので。そこはあれなんですけれど、なんかこの社会って、認知症って人事に伝えたら、もう退職まっしぐらみたいな社会のような気がしちゃって。自分はなんか「それはおかしいな」と思って、そういったことを中心に話をしているんですけれど。もう2人が仕事に就いていないので、自分一人の微妙な感じになっちゃったんですけれども。認知症になっても大丈夫な社会ってイメージできますか？

伊藤氏： 私が住んでいるところは今8年になるんですけれど、難しい人もいないし、私が認知症になって、だからよろしくとか言ってる人もいないんですけれども。8年になっているけれども、「住み慣れたところでこれからの生活をしたい」というの

が一番なんですね。住み慣れたところっていうのは、つまり今主婦だから、コンビニに行ったり、郵便局に行ったり、スーパー行ったり。そういう今まで住んでいたところの風を感じる。そのまま自分の病気と戦いながら、あとキャラバン・メイトの方とかに支援を受けながらね。進行するしないは別として、そういうところで生活し続ける。そんな地域になってほしい。

矢作氏：　そうですね。伊藤さん、めっちゃいいことを言ってくれて、隣の人に認知症って伝えると、急に態度が変わったりとかね。そんな町は嫌ですね。あと、賃貸会社に伝えたら、次の更新しませんとか。ないと思いますけど。新しく新規で契約する時に「認知症です」って言ったら申込みできないとか、そんな社会嫌ですね。

こんな社会になってほしいっていうのは、あつたりします？　自分は、妻の親族には一切名前がバレないようにして、今、仮名で職場の人の名前を使って活動しているんですけど、これって何かと言うと、「スティグマ」と言われる「認知症だからこうだ」っていうことが、すごくこの世の中にはびこっているんです。妻のお義母さんに知られると、絶対に「結婚をするな」から始まって、その後、「この薬はどうだ」とか、「この対処法はどうだ」とか、この怪しい薬を持ち出したりとか、セラピー持ち出したりとか、そんなことがすごく面倒くさいなと思ったので、2人で決めて言わなかったんですけども、前田さんの的に認知症の偏見を感じたこととかがあつたりします？

前田氏：　それは私の場合はないですね。私自身も「自分が認知症なんだ」とかということは、別に平気で言える。別に事実は事実なんで、そんなの隠す必要はないですし、ごく自然に聞かれたら、そう答えちゃう。決して自分を飾ったり変えたりしようとは思っていませんし、間違った情報を伝えるつもりもないんで、そこはストレートにいかないと。

あと、結果的に認知症は何なんだっていうこと自体を知らない方も多いです。小さい時によく年齢のいった人が変な行動をする「あれが認知症のことだったのかな」って。今はわりかし分かるんですけども。小さい頃は全然そういうことに気がつかなかったです。まあ、そういったところがあるかなと。

矢作氏：　ごめんなさい。急に頭が回らなくなってきました。鈴木さん、助け舟出してくださいませんか。

伊藤氏：　偏見のことじゃない？

矢作氏：　あー、偏見のこと。

伊藤氏：　偏見を感じるとか。

矢作氏：　偏見を感じるとか、自分に対して、この病気、嫌だなんて感じたとか・・・？

伊藤氏：　そのことを認知症だって言っちゃったら、相手が自分を見る目が今までと違ってきたとか。

矢作氏：　そうですね。他人の視線が違ってきたとかありますか？

伊藤氏：　特にはないんですけど、奥さんに話したらば、旦那さん、それまで私と会うとニコニコ挨拶してくれたんですけど、スッと行っちゃったとか。勘違いかもしれな

いんですけど。

矢作氏： 被害妄想かもしれないけど。

伊藤氏： そう。今まではちゃんと挨拶してくれたけれど、なにか気まずかったかなとか。

矢作氏： あとやたら優しくなる人とかいません？

伊藤氏： 「一人で来たんですか？」とか？ 最初そういうのありました。「一人で来たんですか？」ってというのは、つどいに参加した時に、「一人で来たんですか？」って優しく言ってくれたことはありました。

矢作氏： 優しさなんですけどね。「いらんわ、その優しさ」って思ったりすることもあるんですけど。普通の人間だわ。すいません、いっぱいいっぱいになっているので。どんな話を・・・？ ちょっと助けてもらいたいなあ。

鈴木氏： 「こんな社会であつたらいいな」「こんな社会だったら幸せだな」ということを、最後一言ずつもらえるとありがたいですね。

伊藤氏： 中学生も高校生も、オレンジのリングをつけて、町を歩いてほしい。そうすると、本人が「オレンジが認知症関係だから、あの人に声を掛ければ、なにか笑顔でしてくれるかな」っていうね。そういうまちづくり。中学小学校ぐらいから、PTAのお母さん、お父さんも勉強して、正しく理解して、そういう人達が溢れる町になってほしい。

矢作氏： ありがとうございます。自分も最近子どもが生まれて、やっぱり学校に行った時に、PTAとかそういうところに参加して、「認知症だ」って言うか言わないか迷うでしょうね、今後。その時に親達が、「あの親、認知症なんだって」っていうことを言われて、自分の子どもが傷つけられるようなことがあったら、どうしてやろうかなって思いますけど。そういったことがない社会はいいなあと思いますね。あと、子どもが「パパは認知症なんだよ」みたいなところを、「え、認知症って、ただ忘れちゃうだけでしょ？ ほかに何も変わらないよ」みたいな認識にさせるっていう教育も、今後、必要なかなって思っています。前田さん、どうですか？

前田氏： あんまり特別に、認知症というこの一種の病気を扱う必要はないと思います。普通のほかの病気も同じであって、「認知症だけがどうのこうの」っていうのは、根本的には何か偏見があるかな。私自身は別に、問われたら「認知症ですよ」っていうふうに答えるつもりですし、それを隠すつもりも毛頭ない。事実はまだ隠せませんから。むしろ、その事実を隠してやっていくことで、それがわかった時に、逆に「あの人に裏切られた」というふうに思われることの方が、大きな問題になるかな。だから、決して隠したりせずに、「今、私がこうなんですよ」というふうに言うておくことが、むしろその相手の方と、より近い関係の人間関係が生まれるかなと思います。決して作る必要はないと思う。

矢作氏： そんな感じで、何分まででしたっけ？

鈴木氏： だいたい今3時ですけど、あと10分でクローズになっています。

矢作氏： あと10分話さなきゃいけないんで。なにか皆さんからありますか。どうぞ。ありがとうございます。

YOU 氏： 本当は、参加すべきなんですけど、ちょっとやられちゃったんで、参加できなくてごめんなさい。皆さん、素晴らしい、いろんな考えや意見をお持ちですね。僕が一番最近気にしているのは、介護する側の「あーすればいい、こうすればいい」。そればっかして、僕達にアドバイスないね。ない。お医者さん行っても、「効くか効かないかわかりませんが、飲みますか？」とお薬いただいただけで・・・。あ、お医者さんの悪口言っちゃいけない。

矢作氏： ちなみにどこの医者さんですか？

YOU 氏： いやいや。すごく仲よくて、優しくて、いい先生だから、ものすごく尊敬しているんだけど、今の医学では、それがいっぱいいっぱいだって。今度できた新しいお薬も、300万ぐらいするのに。それ僕は買えるからいいけれども。

矢作氏： いいっすね。

YOU 氏： だいたいみんな、どうするんだ？ しかも、100%のうち認知症っていうのは、アルツハイマーが70%で、70%のアルツハイマーしか効かない。そのお薬はさらに、その70%の中の20%しか効果ない。しかも、その中で初期の人しか効果ないけれども、300いくら払いなさい。それ、僕はいいですよ。

矢作氏： いいですね。払いましょう。

YOU 氏： そうですか。じゃあ、みんなの分、払ってあげるから。

矢作氏： 本当ですか、ありがとうございます。

YOU 氏： なんて冗談が出ちゃうくらい、非現実的なんですよ。僕、アドバイスほしかった。いろんなアドバイスね。でも、自分で考えた。まだ僕、初心者だから。認知症の。今もさっきフツて止まっちゃったけれども、まだ少しいろいろ残っているうちに・・・。駅に着いたのね、ある日。「あれ、ここどこ？」例の認知症の症状が出た。だけれども、勉強していたから、「あ、これ認知症の症状だ」。自分で認識できなくなっちゃったら、もう程度が重いと云うけれども、「あれ、これ簡単に、『自分が認知症が出た』って認識できるじゃん」。「待って、変なところで降りちゃったな」。駅の表札見たら、戸塚となんとかって書いてあった。見たら、「戸塚に行く用事だった」と思い出して。それを思い出した後で、いろいろ思い出してきたんでね。これ誰かにこういうアドバイスもらえたらな。それ、自分で考えついたっておかしいけどもね。人のアドバイスや介護者の「そういう人にはね、こうしてあげたらいいんだよ」というのを、ナンセンスな話をいっぱい聞いた。

矢作氏： それを聞きたい。ナンセンスな話。

YOU 氏： 例えば、「防ぐための食事」というのが出たんです。それは、アメリカのニューヨークの何とか大学、僕も知ってる、すごい大学のすごい先生の論文だっていうのね。「お酒は飲みすぎないでください。」「食事は気をつけてください。」もう僕の大正時代の死んだお袋と同じようなことを言っていますよね。尋常高等小学校しか出ないお袋が、「お前こんなことしちゃダメだよ。」「深酒はダメだよ。」それと同じことが、アメリカの偉い大学の先生の論文として発表していただきました。僕はそれ一生懸命読んで、笑っちゃいけないかな？なんてナンセンスでした。ナンセンス

だよ、深酒するなって。それは、認知症も関係なく、誰だってそうだから。そんなのを今ね、ちゃんとまとまらないけれど、批判がましいことを言っちゃいけないんだけど、そういうナンセンスが、高レベルから低レベルのところまで、はびこっている。認知症の理解度は、僕達で、認知症の僕達で打開して行って、いろんなことがわかるように、みんなに伝えていきたいなと思っています。

矢作氏： ありがとうございます。

YOU氏： 失礼しました。

鈴木氏： ありがとうございます。残りがもうあと4分ということで、すごくちょうどいい時間になってまいりました。皆さん、視聴されている方はご存知だと思いますけれど、今お話いただいた4名の方は、皆さん認知症をお持ちの方です。「え、こんなに喋るの？」っていうところから、おそらく感じていらっしゃる方もいるかもしれませんが、「私達まだまだいろいろできる」「これから社会を変えていけるんだ」というところの希望のメッセージをたくさんいただきました。認知症になっても、楽しく過ごしていく。趣味を生かしてやっていく。伊藤さんからいただきました。住み慣れたところで住み続けられるように、そんなような社会を望みたい。矢作さんからは、働き続けられるように。認知症というふうに言ったからといって、クビになってしまうような社会ではなくて、その方が最後まで働き続けられるような環境が整えられるような社会であってほしい。前田さんからは、認知症とか関係なく、オープンにすることで、お互い人間関係がきちんと築けていけるような社会、そんなような社会があったらいいなというお話。最後、飛び入りでYOU様にお入りいただきました。診断後に、きちんとした情報をいただいて、「いろんなことがまだまだできる」というところの前向きな希望のある情報を、お医者さんからもいただきたい、というようなお話ですね。このようなお話が出てきたところで、いよいよお時間になりますので、今日お開きにしたいと思います。本当に皆さん4名様、希望大使ということで努めていただきまして、ありがとうございました。